地理空間　13-3　139-141　2020

地域活性化におけるエスニック資源の活用に関する研究の意義

ー特集号の趣旨ー

山下清海

立正大学地球環境科学部

国内外を問わず，国境を越える多様な人びとの増加に伴い，エスニック集団とホスト社会との間ではエスニック・コンフリクトが高まっている（山下編, 2016）。地域社会の多民族化に対しては，とかくそのマイナス面に大きな関心が寄せられ，世界各地で反移民感情の高まりもみられ，日本でもヘイトスピーチが行われるようになった。

しかし，世界各地で移民が増加し，社会の多文化化が進んでいく将来を考えた場合，多様なエスニック集団（移民，先住民）の存在を，エスニック資源として捉え，地域活性化のために積極的に活用することを検討することが，社会的にも学術的にも求められているのではないだろうか。エスニック集団が移住先において起業したり，出身国とのネットワークを活かして，地域経済の活性化をもたらしたり，エスニック集団の多様な社会的・文化的な特色がホスト社会の国際化や活性化を促進するようなプラスの効果についての研究は少ない。

本特集号のテーマは，地域活性化におけるエスニック資源の活用である。まず，エスニック資源とはいかなるものであるかについて整理しておきたい。

それぞれのエスニック集団は，固有の生活様式を有している。この場合の生活様式には，言語，宗教，慣習，技術などの狭義の文化だけでなく，経済活動も含まれる。エスニック集団の生活様式が資源となり，地域活性化を促す場合，次の二つの類型に大きく分けることができるのではないだろうか。

一つは，エスニック集団の生活様式が商品化され，地域の価値向上やそれに付随する経済的利益の創出がもたらされる場合である。例えば，エスニック集団の食文化が，ホスト社会から好感されると，当該エスニック集団が経営するエスニック料理店への来訪者が増加し，エスニック集団が集住する地域が活性化される。

一方，エスニック集団が有する伝統的生活様式は，ホスト社会や他のエスニック集団との交流に伴い変容していく。このような状況は，エスニック集団が保有・維持してきた生活様式の真正性を再考させ，エスニック集団内のアイデンティティを活性化させる契機ともなる。そのようなエスニック集団の動向と結びついた地域は，経済的な側面に限らず，社会文化的な側面でも価値を向上させる。エスニック集団が信仰する宗教施設，相互扶助の団体組織，集団向けの商業施設などが集中する地域は，同一集団にとって価値ある地域となる。それらの地域の中には，ホスト社会や他のエスニック集団からも注目されるようになる。

次に，本特集号を企画するに至った過程について若干説明しておきたい。

本特集号の代表者である筆者は，科学研究費基盤研究（A），「日本におけるエスニック地理学の構築のための理論的および実証的研究」（2006～2009年度）において，日本におけるエスニック

地理学の構築を目指した。それらの成果は，山下編（2011）として刊行した。引き続き，科学研究費基盤研究（A），「日本社会の多民族化に向けたエスニック・コンフリクトに関する応用地理学的研究」（2011～2014年度）に取り組み，それらの成果は山下編（2016）として，日本地理学会出版助成を受けて刊行した。この研究は，おもに移民とホスト社会の間で出現するエスニック・コンフリクトの形成，要因などの解明に焦点を当てたものであった。

これらの研究を進めていく過程で，エスニック集団とホスト社会との関係について，地理学，社会学，文化人類学をはじめとする多くの先行研究では，エスニック集団がもっているエスニック資源をプラスに評価する視点に欠けていたことに気がついた。

世界各地の地域社会では，多民族化が進んでおり，日本においても，在留外国人が増加し，その国籍も多様化している（山下，2017）。人口減少，高齢化が進行する日本においても，多様なエスニック集団の増加を，新たなエスニック資源として捉え，地域活性化のために積極的に活用する可能性について検討することが重要である。

そこで筆者は，長年，エスニック集団に関する研究に従事してきた研究者の協力を得て，国内外の多くの事例を比較検討することにより，地域活性化においてエスニック集団が有するエスニック資源を積極的に活用する方策に関する研究に取り組みたいと考えた次第である。

このため，科学研究費基盤研究（B），「地域活性化におけるエスニック資源の活用の可能性に関する応用地理学的研究」（2017～2021年度）を申請し，幸いにも採択された。本特集号は，この科学研究費の研究成果の一部をまとめたものである。

本特集号では，海外および国内におけるさまざまなエスニック集団とホスト社会との関係に着目し，地域活性化におけるエスニック資源の活用の可能性およびそれらの課題について考察することを目的としている。

フィールドワークを重視してエスニック地理学に関する研究に取り組んできた7名のメンバーの論文から，本特集号は構成されている。まず海外の事例について5名が，そして日本の事例に関して2名が執筆している。

海外の事例では，まず北アメリカから始める。ロサンゼルス大都市圏では，1970年代以降，多民族化が進行してエスニックタウンが増加し，エスニックモザイクが形成された。矢ケ﨑典隆は，エスニック社会を読み解くための視点と方法を提示しながら，ロサンゼルスを事例にエスニックタウンの動態について，エスニック資源の活用に着目して検討する。

カナダでは，多数の国指定史跡が存在し，最近では，先住民や女性，エスニック集団の歴史にも注目が向けられ，観光の促進にもつながっている。大石太郎は，沿海諸州におけるフランス語系少数集団，アカディアンに関連する史跡を事例に，エスニック集団の文化遺産を地域のエスニック資源としてとらえ，それにもとづく地域活性化の試みを検討する。

次にヨーロッパの事例を取り上げる。イギリスでは，旧植民地からの移民が増加している。根田克彦は，タワーハムレッツ・ロンドン特別区によるブリックレーンのセンター活性化政策とその課題を論じる。

スペイン・バスク地方で最も重要な文化的祝祭は，毎年開催されるバスク・ブックフェアである。石井久生は，このような地域固有のエスニック資源を活用した祝祭が，衰退しつつあったバスク語話者コミュニティを再活性化させるのに有効な装置となっていることに注目する。

差別や排除の対象となってきたエスニック集団の場合，自らの生活文化を示すようなエスニック景観はできるだけ示さない傾向がある。このようなエスニック集団に関する研究は乏しかった。加賀美雅弘は，オーストリアの先住エスニック集団であるロマに関して，ロマの固有の文化が地域振興に寄与する可能性とともに，それを阻む要因について論じる。

日本の事例については，コリアタウンとチャイナタウンを中心に考察する。福本　拓は，大阪市の生野コリアタウンを例に，近年の韓国文化の世界的流行を念頭に置いて，店舗・景観の変容と観光客の行動特性との関係を論じる。

山下清海は，横浜中華街をはじめ日本における三大中華街や新たな「中華街」の設立を図る構想を中心に，地域活性化におけるエスニック資源の活用の実例とそれらの課題について検討する。

［付記］

2020年6月に開催予定であった地理空間学会第13回大会のシンポジウムで，筆者らの研究成果を発表させていただくつもりであった。しかし，新型コロナウイルスの感染拡大により延期され，結局，2020年12月6日に，オンラインで開催された大会で，シンポジウムの機会を与えていただいた。地理空間学会の役員，集会委員会，編集委員会の委員の方々には，特別のご配慮をいただき，深く感謝申し上げる次第である。

なお，本研究は，2017～2021年度日本学術振興会・科学研究費補助金基盤研究（B）「地域活性化におけるエスニック資源の活用の可能性に関する応用地理学的研究」（課題番号17H02425，研究代表者：山下清海）の研究費の一部を使用したものである。

文　献

山下清海（2017）：増加・多様化する在留外国人－「ポスト中国」の新段階の変化に着目して－．地理空間，**9**(3)，249-265.

山下清海編（2011）：『現代のエスニック社会を探る－理論からフィールドへ－』学文社.

山下清海編（2016）：『世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会 －日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究－』明石書店.

Significance of Research on the Utilization of Ethnic Resources in Regional Revitalization

YAMASHITA Kiyomi
Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University